
「ありがとう」

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ありがとう」

【Nコード】

N4472D

【作者名】

切香

【あらすじ】

ある冬の日、夏梨は傷ついた冬獅郎を家へと連れ帰る。昏々と眠る冬獅郎を看病する、夏梨の思い。シリアス短編

「ありがとう」前編(前書き)

注意： 劇場版BLEACH2(小説版)のネタバレが入っています！

「ありがとう」前編

午後六時を知らせるメロディーが、雨の町に鳴り渡った。

傘の柄を握り締めて、あたしは薄暗い通りを小走りに走っていた。

まずったな・・・

せめて、遊子に電話で連絡を入れときゃよかった。

今頃晩御飯を準備して、戻ってこないあたしを心配してるかもしれない。

メシまで作っておいてもらって、黙って遅れるなんて・・・自己嫌悪に駆られる。

帰ったら片付けと、洗濯物置みはあたしがやろう。そう、思ったときだった。

あたしは、不思議な風景を見つけて、思わず立ちどまった。

「なんだ？あれ？」

一兄が通ってる、空座高校が灰色にそびえ立つのをあたしは見上げた。

雪・・・降ってる・・・

何が不思議って、他の場所は雨なのに、本当に限られたその場所だけ、雪が降ってた。

雨の中をちらり、ちらりと粉雪が降るのは、綺麗というより・・・やっぱり奇妙な風景だった。

ちよつとだけ、な。

あたしは空座高校の方へと、走る向きを変えた。

走っていてすぐ気づいたが、雪が降っているのは高校じゃなく、その後ろの森だった。

こっちか・・・

雪につられるように、あたしはどんどん雨にけぶる森に足を踏み入れる。

どんどん暗くなる景色が、全く怖くないといったらそれは嘘だったけど。

あたしは正直、それどころじゃなかったんだ。

「冬獅郎！いるのか！！」

どどん気温が下がっていくと同時に、忘れられないあの気配を感じたから。

それは、凶悪な気配をビンビンに撒き散らしてるあのバケモノ共に比べれば、ささやかなものだったけど、確かに感じる。

気になるのは・・・それが、前にあたしを助けてくれたときに比べたら、本当にかすかな、消えそうなものだったことだった。

気配は、ずっと同じ場所にある。それだけはあたしにも分かった。もしかして、動けないのか？

あまりに寒くて、歯がガタガタ音を立てる。

静まり返った森の中で、茂みを掻き分けたとき。

あたしは暗い中、何かに躓いて転びそうになった。

「何だよ・・・あぁっ！」

振り返った途端、あたしは大声を上げた。

暗い中でも、銀色の髪ははっきりと分かる。

着ている黒い着物と白い羽織も、あの時と全く同じだ。

ただ・・・冬獅郎は、うつぶせに倒れたまま、ピクリとも動かなかった。

「・・・と、冬獅郎？」

四つんばいになって、冬獅郎の顔を覗き込む。

目を固くつぶったまま、あたしの声にも全く動かない・・・

ヤバイ・・・

あたしは慌てて冬獅郎の肩を掴み、膝の上で仰向けにひっくり返した。
うっ、と顔を背けなくなるくらいの血の匂いに、あたしはむせそうになる。
着物の腹のあたりが、10センチ以上も真っ赤に染まってる。
口元に持っていったあたしの手は、かすかに震えてた。

しっかりしろ。いつもやってるだろ、病院で！

急患は見慣れてる。交通事故にあって血まみれの奴とかも何人も見
てきた。

あたしは自分を励ました、息はしてる。

救急車！と一瞬思っつて、その考えをすぐにかき消した。

こいつ、確かこの格好の時は、普通の奴には見えないんだっつたよな
・
・

仮に見えたとしても、「死神」のこいつを病院に運び込むことはし
たらいけない気がした。

とりあえず、家に連れて帰って一兄に相談するしかねえ。

家は病院だし、冬獅郎も一兄のことを知ってるって前に言ってたか
ら、何とかかなりそつだ。

「しょうがねえな！」

あたしはコートを脱ぎ、その下に着てたトレーナーも脱いだ。寒い。
死ぬほど寒い。

それを我慢して、その下に着ていた薄めのTシャツを脱いでから、
またトレーナーを着なおした。

そして、Tシャツを引き裂いて、血が止まらない腹にぐるぐる巻き
つける。

ちよつと迷ったが、コートはその背中に羽織らせた。

そして、あたしよりもちよつとだけ小さいその体を背負って、何と
か立ち上がった。

「重つ……」

体重よりも、刀が重い。でもコレを置いてく訳にはいかねえ。あたしは何とか体勢を整えると、家に向かって歩き出した。

「はっ……」

あたしはあと1キロでクロサキ医院、というところで、塀に体をもたせ掛けて休憩した。

ダメだ。足がガクガクする。

重いんだよお前！

肩に乗った白い顔に文句をつけようとしたけど、傷が痛むのか、苦しそうにゆがんだその表情をみたら、何もいえない。

あたしはできるだけ動かさないように、その体を背負いなおした。

サッカー、あんなにイヤそうだったのに結局助っ人引き受けてくれたのは、あたしの膝の傷をみたからだろ。

その後バケモノに襲われた時も、あたしを庇って戦ってくれたもんな。

ここであたしが助けられなくて……どうすんだよ！

その時だった。

「冬獅郎！」

突然静かな通りに響いた声に、あたしはビクツと肩を震わせた。

この声……

「一兄！」

「夏梨？」

返して来たのは、間違いない一兄の声。でも、ひどく驚いてるみたいに聞こえた。

あたしは冬獅郎の体をそつと地面に下ろして、コートをその背中に

かけた。

たたた、と足音がして、見慣れたオレンジ色の頭を見たとき、あたしはほっ、と全身の力が抜けた。

「おい！夏梨！と・・・やっぱり冬獅郎か？なんでお前ら・・・」

一兄はあたしの肩に手をかけて、あたしが雨と泥と血で汚れてるのをみて、眉間のシワを深くした。

そして、塀にもたれかかって気を失ったままの冬獅郎を見て、ハッと息を飲み込む。

「前に、サッカーの試合の助っ人をやってもらったことがあるんだ。それに・・・その後あたしがバケモノに襲われた時、護ってくれたんだ」

「・・・お前、そんなこと全然言わなかった。冬獅郎もだけど・・・」

一兄は、すばやく冬獅郎の傷を確かめながら言った。

「・・・ごめん」

あたしは顔を一兄から逸らした。

一兄だつて色々大変なのは知ってる。

そんな時にあたしが襲われた、なんて言ったら、一兄のことだからものすごく心配すると分かった。

まあ、助かったんだしいいか、くらいに思ってた。

「・・・バカヤロー」

一兄はあたしの顔を見てそれだけ言うと、冬獅郎に視線を戻した。

「夏梨を護ってくれた奴を、追ってる奴に引き渡すなんて・・・できるわけねえよ」

あたしのコートを取るとあたしに返して、自分のコートを冬獅郎の上にかける。

そして、肩と膝の後ろに手をやって、びっくりするくらい簡単にひ

よい、と持ち上げた。

「夏梨。あとちよつとだけ走れるか」

「もちろん！」

そしてあたしは、一兄の背中を見ながら走り出した。

「ありがとう」後編

規則正しい、寝息が聞こえる。

あたしは、一兄の椅子に三角座りしたまま、冬獅郎の寝顔を見下ろしてた。

照明を落とした部屋の中は薄暗くて、外の街灯の明かりが、かすかに部屋に差し込んでた。

「一体どうしちゃったんだよ、お前・・・」

ぼつり、と呟くけど、もちろん返事は返ってこない。

クロサキ医院から包帯だの薬だのを持ち出して手当てして、一兄のベッドに寝かせたのが、夜7時前。

それから10時くらいには一度起きたらしかった。

一兄が怒ったみたいな声で何かを話すのが聞こえたから、すぐに一兄は出てきて、

「傷が痛むんだってよ。明日井上呼ぶから、それまでそっとしていてやれ」

って言った。

一兄は、リビングのソファでもう寝てしまってるだろう。

その黒い着物の袖からは、真っ白い包帯がのぞいてる。

誰がやったんだ・・・

あたしは唇を噛んだ。

あたしが知ってる冬獅郎は、おそろしく冷静で、おそろしく強かった。

これぞ本物の「死神」だっと思って思うくらいに。

そんなやつを、ここまで痛めつけたやつは誰だ。

そのとき、寝息が少し乱れ、あたしは冬獅郎の顔を凝視する。

びっくりするくらい白いその顔が、ちょっとだけ、赤くなってる。額に手をやってみると、その白さからは想像つかないくらい、温度が高かった。

あたしは、用意してあった水の入った洗面器にタオルを浸して、絞る。

できるだけそつと額にタオルを乗せようとしたら、ふっ、と目が開いた。

その青い目が、ゆっくりとあたしに合わせられ、止まる。どきりとした。

あたしはタオルを持ったまま中途半端なところで固まった。

「お前・・・」

「お前じゃなくて夏梨だ」

全然怒ってないはずなのに、なんでか怒ってるみたいな声が出た。

「誰がやったんだ、その傷！あたしがぶん殴ってやる」

冬獅郎はあたしの剣幕にびっくりしたのか、ちょっとだけ目を見開いた。

そして口の端を曲げようとして・・・腹が痛いのか、すぐしかめっ面に戻った。

ちよつと待て。

「お前、今笑おうとしただろ！人が真剣に・・・」

そこまで言いかけて、言葉をぶつと切った。

いいながら分かったんだ。こいつ、あたしとおんなじだ。

こういう時、何があったか聞かれたところで、絶対に何も言わないやつだ。

あたしは、額にかかった銀色の髪を指で避けて、その額にタオルを置いた。

ひんやりとして気持ちいいのか、それとも文句をいう気力もないの

か、冬獅郎は黙って目を閉じてる。

「黙って、ひとりで、何かやるうとしてるんだろ」
ここからもすぐ、いなくなるつもりなんだろ。

また寝たのか、あいつはピクリともしない。人が心配してんのに。戦うやつには、誰かを傷つけるために戦うやつと、護るために戦うやつがいるような気がする。

お前があたしにしてくれたことは、間違いなく護るほうだ。
今度は、一体誰を護ろうとしてんだ……？

「……冬獅郎」

あたしは目に力を入れて、冬獅郎を見下ろした。

「お前に助けたいやつがいるみたい。お前を助けたいやつだっていっぱいいるんだ。
忘れんなよ」

絶対に、明日織姫ちゃんが来るまで、見張ってようと思ってたのに。気がついたら、ベッドの縁に頭を乗せて、あたしは寝てしまったみたいだった。

夜中に一度だけ、ベッドがかすかにきしんで、少しだけ目が覚めた。ふわり、と温かい何かの背中にかけられて、あたしはまたとるとろと眠たくなる。

「ありがとう」

ヒュウツ、と一瞬、冷たい風が吹き込んだ。次に、ピシリ、と閉まる窓の音。

なんだ、夢、か……
夢見ごこちで思ったあたしは、うつらうつらして……急にがばつ、と起き上がった。
しまった！

ベッドにはもう冬獅郎の姿はなかった。

冬獅郎の寝ていた場所を手で触ってみたけど、もう冷たくなってい

た。

起き上がったあたしの肩から、冬獅郎がかけてた毛布が滑り落ちる。慌てて立ち上がり、窓を開けて通りを見下ろしたけど、どこにも姿はなかった。

あの気配も、どこにも感じない……

「バカヤロー……」

あの怪我で、一体何ができるっていうんだよ……

あたしは冷たくなった窓枠を叩いた。

まだ、青白い月が出ていて、あたしはそれをにらみつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4472d/>

「ありがとう」

2010年10月10日22時27分発行